

短 歌



教室「道草の詩」 川面 よし子

秋の日

借毛本郷 秋庭 幸子

ゆつくりと秋の気配を感じつつ百日紅の下を歩めり
草引きて黒つち見ゆる清々と傍らに鳴くつくつくぼうし
暮れかかる静寂の中に鈴虫の鳴く声透る今宵中秋
波頭がしら白く碎け来海風に足どり軽く君ヶ浜行く
犬吠の真昼の空は青く澄み岬の端に灯台仰ぐ
亀山湖の巡りの山の紅葉もみじして釣船一つ遠くに浮かぶ
杉山の小径に赤く烏瓜つる絡まりて秋深みゆく

わが心の詩

横浜市(元山武市民) 朝見 文江

住み慣れた我が家を去る日振り向けば壁に残れる表札の跡
新しく住みにし処港町過せる日々に夢を抱きて
夕食の一人嗜む赤ワインただ一杯の美酒に微睡む
今日も又友と語りし散歩路静かな風に秋桜揺れて
夕暮れの車窓より見る街灯り家路に急ぐ人も映せり
ご来光今朝も拝みし合掌の命在る身の貴き日々よ
WBC世界一なり栄冠の勇姿眩しく歓喜溢れる

新たななる容

本須賀 今関 恵子

左千夫大人の詠みし古木の桜今ほころび始む朱の御堂脇
夕暮れの車窓に遠くつらなりて桜の花の仄明り見ゆ
散り初めし桜の傍へ丈低き満天星の花鈴なりに咲く
遠距離を通ひし夫の通りしとふ花ふぶくけふ並びて歩む
燕麦えんばくのそよげる畑に聞こえる選挙カーの声ひたすらにして
夏みかん高みにふたつ低きにはひとつ残れり灼熱の昼
この街の医の砦なるセンターの新たななる容骨組み仰ぐ

刑部岬

本須賀 川島 隆

はぜの葉のあら方落ちて総生りの実は枝枝を撓めて太る
厳寒に田を起し行くトラクターのオペレーターは着脹れて乗る
田一枚覆ひ尽くして白白と浜風に揺るる種漬花は
水無月に八十三歳となりし日に小さきケーキを娘持ち来る
スマホより幼馴染の名を削除コロナで逝きし丈夫なあいつ
貰ひ来し浜防風を茹でをれば潮の香りと緑鮮やぐ
飯岡の刑部岬に立ち見れば九十九里浜ここに始まる

免許返納

戸田 木内 栄子

道迷い迷うはずなき道迷い夫は決意す免許返納

不自由は覚悟車無き日々の暮しの制約重し

いづれ来る「俺が先かなお前かな」共に米寿の心のゆらぎ
母逝きし後女々しいなどと疎みしが今ならわかる父の晩年
息切れが日ごとに増せりこの猛暑食の仕度もたわやすからず
咳いでとどまらざりき去年よりも身の衰えを日々確かめつ
庭先の薔薇の紅七分咲き明日に期待のふくらむ夕べ

残生

姫島 木村 和子

橋の下に精霊舟を見送りし十六歳の父との別れ

ひととおりの役目終えたる残生を本に親しむ明け暮れとなす
良く眠る美味しく食べるそれでよし世情の批判ごまめの歯ざしり
遠き日にヒッチハイクで大江山跳ねつ返りの友の名おぼろ
新しき景色に出会う旅したき生きてるだけでブラボーかなと
紅葉が空を支えているような楓の幹立つ南禅寺の庭
山科のホスピスに古き友見舞い語り明かしぬ七日後の訃報

カレーの味

小松 斉藤 利治

この年も雑煮の喰える有難さほうららほらりこらり噛みしむ
生きおれば七十二歳亡妻の十六回目彼岸花咲く

針穴へ糸を迷わす両眼なり月日の波に洗わるる儘

十月の朝茶に思う西千葉の駅に降り立つ制服の孫

ひたすらにカレーの味の嬉しさにジャガ芋の皮寡夫の手が剥く

箸止めて眺め入るなり職人の手より生まるる厚焼き卵

水音が薬缶に入りて今日もまた朝の始まる独居の館

邂逅

本柏 竹之内幸子

ピノキオとイタリアの地図居間に掛け娘の若い日の輝きの日々
草木染の土産を持つて友に会う高速バスではやる心に
ふるさとの幼き弟妹平戸海負けてもいいよ怪我をしないで
山奥で無駄なく暮らすほほえみの「やまと尼寺精進日記」
子等と掃く秋の校庭银杏葉を何枚あるか葉っぱ六十四
藁ムシロ土間に織る音冬仕事見る見るうちに母は一枚
庭に生る三宝柑の黄金の実祖母の二重の腰見え隠れ

海色の空

日向台 立川目陽子

逝きにける人の数には遠けれど辛夷こぶし一樹に満開の花(三月十一日)
十二年目の墓標と仰ぐ花辛夷しろいひかりと海色の空
子を負ひて自転車こげど漕げど死ぬ母に会へざり春暁の夢
悔しくて泣く一途は吾にすでになし降りだせる雨をはじく水仙
あたたかい光に倦んだ紅ツバキ散つてしまへよ花冠くづして
侘助わびすけ椿を濡らした最後の雨はいつ残つた一花が冬を終はらせた
言葉には表情がないいけないけれど良きはうに読むいまのメールは

日々の事

富田幸谷 平山 美里

群青を友と歌いて巢立ちゆく子の行く道よキラリ輝け
重大な秘密を報告するようにツバメのヒナが孵りましたと
台風を天気アプリで追いかける来るかそれるかそれるか来るか
ノンアルは結局ジュースと同じだよ背伸びをしたい息子十六
スプーンで漬け瓜のワタこそげ取り甘い夏の香満ちる裏庭
銀木犀の香りが好きだという君の声思い出す秋の青空
身体には気をつけようと言いついてラインを閉じる四十歳の冬

ねむの花咲く

大網白里市(成東短歌会) 深川 義弘

しなやかに蔓をフェンスに絡ませて鉄仙の花門の辺に咲く
藻を透かし朝の日の差す水底を泳ぐめだかの生き生きとして
涼やかな硝子の皿に身を反らす鱧の湯引きを酢みそに食す
幹太く四方に伸びし高枝に色淡々とねむの花咲く
太陽と地球と月と天王星ならば夜空の神秘に見入る
コスモスの陰より白馬歩みきて柵越しに吾のカメラを見つむ
勾玉に似て温室の中に咲く翡翠かずらの青深きいろ

河津桜

大堤 藤代百合子

木戸川の河津桜の堤防を紋白蝶と共に歩みぬ
枯れ草の中から芽吹くよもぎ草ざる一杯に摘みしあの頃
新緑の楓並木の構内を木漏れ日背なに娘と歩みをり
ゼラニウム緑の枝を広げつつ深紅の毬を大きく咲かす
いつの間に背丈程伸び透かし百合十二の蒼空を見上げて
ペチュニアの今を盛りに溢れ咲き今日も明るい我が家の狭庭
舞姫と名付けられたる紫陽花の淡い色合い淑女の如く

また初春はるが来る

市原市(元富口) 村上 久江

三年余の時は過ぎゆき夫在りし世のうすれゆきまた初春はるが来る
暮れゆける茜の空の静けさよわが生涯に悔ゆることあらむ
ピオーネとぶ葡萄の甘さよ老いらくの恋などどふと呟きてみむ
風荒るる寒の街角旗ふりて早く渡れと吾あに指示をする
おごそかな読経のつづく茶筌供養この間にも戦続く国あり
雑多より解かれ晴ればれ和服着る女性ら麗し吾わもしつとりと(茶筌供養)
紅深く艶めき咲けるつつじ花一首詠まむとしばし佇む

身辺

津辺 安井はる子

寒き雨つづきて庭に餌をあさる鶉ひよどりの鳴く声さへもなし
無沙汰託ぶ電話に明日はシルバーの施設に入所と告ぐる声聞く
あたたかに晴れし二月の九十九里の海果てしなく空に連なる
五十年ともに短歌にいそしみし友の訃知りぬ彼岸近くに
草繁る造成地にいつか棲みつきし雉の声聞くこの春もまた
おだやかに逝きしとふ甥の戒名を過去帳に記す雲寒き朝
コロナにて逢へざる日々を悔やみをり甥の明るき声甦る

無言の叫び

日向台 山本 陽子

断捨離に蔵書の処分を思い立ち何故か残せり「沈まぬ太陽」
ここに住み三十五年夢のごとやけに目立つはデイサービスマ
採りたての多さわの野路を賜りぬ亡母ははの味にと丁寧ていねいに煮る
夕つ方ひと際響く蝉の声今日の命を確かむること
簡単な絵文字のメール十五文字豊かな語彙と声も聴きたし
湯上りに少しばかりのストレッツ顔の皺取りムンクの叫び
原爆碑に禱りを捧ぐ首脳等に無言の叫び青空そらより降り来く

おんぶ飛蝗はつた

白幡 渡辺 幸子

夏椿ひと日を咲きてゆうべ落つ真白き花は真白きままに
この夏もおんぶ飛蝗は庭に生れ水遣る紫蘇に其の数を追ふ
いち夜明け茎のみ残る三つ葉より青虫五匹忽然と消ゆ
コロナ禍の素顔にマスク長かりし久々にする化粧馴染まず
クラス会これが最後と思ふ身の術後二年の髪染め迷ふ
二年ぶり運転するもハンドルを握れば確と手足動きぬ
何事も無き明日願ひ寝る前のひとときわれはトランプ捲る

花衣

成東 渡辺美佐夫

梅の香を残したままの花衣一日干したり光の春に

今年また家族そろって福は内蠟梅ろうばいの香の部屋にあふれて

朧なる月の光の中だった君と歩みし九十九里浜

瀬戸内の夜行列車の一人旅ひぐらしの鳴く岡城址へと

新しき年の始めと声高し万葉学ぶ施設の人の

北信濃地獄谷なる露天風呂野生の猿がすぐ傍に立つ

女工哀史の野麦峠びよびように友と立ち見れば渺々飛驒やまなみの山脈

追悼

毎号短歌に寄稿してくださった木内栄子様が二〇二三年一月一七日八七歳で永眠されました。「すぎの実」時代から欠かさず自然詠の佳き歌を呈され、旧山武町短歌会の最後の会員として存在感を示されました。いつも原稿をいただきに参上したり、「文芸さんむ」をお届けしたりするつど、美しいお庭でやさしく接してくださった面影を懐かしく思い起こします。創刊から毎号のご協力ありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます。

(編集委員会)